札響くらぶ Sakkyo Club

56

2011.10

【編集・発行/札響くらぶ】 064-0931 札幌市中央区中島公園1-15 札幌交響楽団事務局気付
メール：info@sakkyoclub.net
ホームページ：http:/sakkyoclub.net/sakkyoclub/

「第9回札響くらぶコンサート」を楽しく聴くために

八木 幸三（札響くらぶ会員）

第9回札響くらぶコンサート
～札響と遊ぼう～

日時／11月5日15：00～
会場／Kitara 大ホール
指揮／尾高 忠明（音楽監督）
ヴァイオリン／伊藤亮太郎（札幌交響楽団コンサートマスター）
管弦楽／札幌交響楽団

尾高音楽監督（©佐藤雅英）

上田会長（札幌市秘書課提供）

プログラム
プレトーク／尾高監督＆上田会長
ワーグナー／楽劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲
メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲ホ短調 op.64
シベリウス／交響詩「フィンランディア」op.26
指揮者に挑戦！コーナー
（課題曲）ブラームス／ハンガリー舞曲5番
ヴェルディ／歌劇「アイーダ」から凱旋行進曲（共演・東海大学第四高等学校吹奏楽部）

■ワーグナー／楽劇「ニュルンベルグのマイスタージンガー」前奏曲

ワーグナーは、それまでの番号付きオペラではなく、通作形式により音楽がドラマと密接に結びつき、さらに示導動機の徹底的な使用や無限旋律の使用で歌劇を楽劇という形に発展させ独自の世界を築き上げた。彼は、破天荒な性格で民衆蜂起に参加し当局から追われながら海を渡る逃亡生活や借金生活をおくっている。そして、ルートヴィヒ2世から莫大な資金援助を受け、自分の作品だけを上演する劇場までつくってしまった。また、人妻とすぐに関係を結ぶ女性遍歴など、まさに波瀾万丈でスキャンダラスな人生なのだ。そうした実生活は、彼の作品にも反映されているのだが、その中で健康的で生命力に溢れ明るい楽想を持つ唯一の喜劇作品が「ニュルンベルクのマイスタージンガー」である。美少女エーファを射止めようと青年騎士が歌合戦で勝負をかける。彼を手助けする靴屋の親方ハンス・ザックスも実はエーファに恋いこがれているが、結局彼女は青年騎士と結ばれる物語は、ちょっと「フーテンの寅さん」風だ。この作品をつくった頃ワーグナーへの批判者も多く、その中でもハンスリックとの対立は有名。彼を作品中に悪役ベックメッサー役に置き換えているほどだ。この作品の前奏曲は、ワーグナー作品の中でも最もポピュラーではないだろうか。勇壮で分厚いオーケストレーションは、いやが上にも気分を高揚させてくれることだろう。

■メンデルスゾーン／ヴァイオリン協奏曲ホ短調 op.64

伊藤亮太郎（札響コンサートマスター）（©佐藤雅英）

メンデルスゾーンはふたつのヴァイオリン協奏曲を残したが、ニ短調の協奏曲は、ヴァイオリニストのメニューインが1951年にメンデルスゾーンの子孫から草稿を見せられ、その存在が知られた。ホ短調の協奏曲は、言うまでもなくベートーヴェン、ブラームスと並ぶヴァイオリン協奏曲の傑作で、どなたも一度は耳にしたことのある名曲。メンデルスゾーンが28歳の時に着想され、その後6年の歳月をかけて完成された。前作のニ短調作品と同じく当時の名ヴァイオリニスト、フェルディナント・ダヴィットの助言を受けながらつくられ、彼にこの曲は献呈されている。ロマンティズム溢れる甘美な名旋律ではじまり、均整のとれた形式美でつくられた3つの楽章は、中断することなく演奏され、心地よい流動感を聴くものに与えてくれる。伊藤亮太郎の華麗なヴァイオリン独奏に期待がふくらむ。

■シベリウス／交響詩「フィンランディア」op.26

シベリウスの母国フィンランドは、一三世紀ごろから六百年にわたりスウェーデンの支配下にあり、その後ロシアが自治の侵害をおこないフィンランドの自由を次々と奪っていった。シベリウスの生きた時代は、まさに祖国の民族的自覚の昂揚、独立への願望が背景にあり、シベリウス自身も愛国独立運動を音楽を通しておこなった作曲家である。交響詩「フィンランディア」は、この愛国独立運動の一環としてつくられた劇音楽がもとになってつくられている。金管楽器で奏でられる「苦難のモティーフ」が象徴するように初演当初はロシアの官憲によりフィンランド国内では演奏が禁止された。曲全体は、「苦難のモティーフ」から「闘争への呼びかけ」へとうつり「祝典へのモティーフ」で激しい闘争でのクライマックスを築き上げていく。札響の雄渾な金管楽器の響きに注目だ。後半に奏でられる民謡風な美しい旋律は、後に詩がつけられて「フィンランド賛歌」と呼ばれる合唱曲になり、この曲はフィンランドの準国歌のように歌われている。

■ヴェルディ／歌劇「アイーダ」から凱旋行進曲

ワーグナーと同じ年に生まれたヴェルディは生涯に30に迫るオペラ作品を書き、「椿姫」や「リゴレット」などヒット作品を次々に生んだ。中でも「アイーダ」はスペクタクル作品として、中学校の音楽でも長らく取り入れられている。第2幕第2場は、このオペラの主要登場人物がすべてそろい、アイーダが慕うラダメス隊長に率いられ、勝利したエジプト軍が堂々と行進することで特に有名だ。この時演奏される凱旋行進曲は、オペラではエジプトトランペットという特殊な楽器が使われる。今回は、この勇壮な旋律を東海大学第四高等学校吹奏楽部が加わり演奏してくれるのも楽しみだ。

演奏会を楽しく聴くために

八木　幸二（札響くらぶ会員）

第543回札響定期演奏会
「ベートーヴェン・ツィクルス－3」

11月11日（金）A日程
11月12日（土）B日程
指揮／尾高　忠明（音楽監督）
曲目
ベートーヴェン／
交響曲第4番変ロ長調 op.60
交響曲第5番ハ短調 op.67「運命」

尾高音楽監督（©Masaaki Sato）

■ベートーヴェン／交響曲第4番変ロ長調 op.60

「トランジスター・グラマー」ということばがあったが、小柄で均整のとれた美人のことを意味したと思う。ロベルト・シューマンは、ベートーヴェンの交響曲第4番を「北欧神話の二人の巨人に挟まれたギリシャの美女」と呼んだことは有名な話。この作品は、前後する第3番、第5番とは対照的にベートーヴェンの交響曲中、楽器編成がもっとも小さく短期間で書き上げられた。この時期にはピアノ協奏曲第4番が同時に書かれ、第5番の構想を練っていた時期とも重なる。しかし、ベートーヴェンはこの作品を決して片手間に書いていたわけではない。まず、第1楽章では実に丹念に書かれた序奏部があり、第2楽章の牧歌的楽想は「田園」を、さらに終楽章の律動感は第7番を予感させるなど、その後の交響曲におけるエッセンスが内包されていると言って良い。全体的に明朗な作品の雰囲気は、当時ベートーヴェンと恋愛関係にあったヨゼフィーネ・フォン・ダイム伯爵未亡人への想いが影響しているからだろうか。「トランジスター・グラマー」のようなギリシャ乙女の魅力をたっぷりと味わってもらいたい。

■交響曲第5番ハ短調 op.67「運命」

普段、クラシック音楽を聴かない人でもこの「ジャ・ジャ・ジャ・ジャ～ン」は、誰もが知っているはず。そして、ベートーヴェン＝「ジャ・ジャ・ジャ・ジャ～ン」となる。これほど有名な交響曲第5番だが、この曲ほど革新的で演奏が難しい曲もないのではないか。「勇壮な運命の動機が全体を支配し、緊密で有機的に構成されている」と言われるこの曲だが、「ジャ・ジャ・ジャ・ジャ～ン」の2小節が動機（曲構成の最小独立単位）または主題とするか、最初の5小節を主題とするか、はたまた最初の5小節は序奏とするか意見がいまだに分かれているのだ。その解釈によって演奏もまったく違ってくる。

たった2小節、4つしかない音なのに指揮者によって別物になってしまうような作品は他にあるだろうか。メンデルスゾーンがゲーテの前で「運命」をピアノで弾いたとき、ゲーテは「人を驚かすだけだ、感動させるというものじゃない、気違いじみている。まるで家が壊れそうだ。」と言ったそうだ。当時としては、ゲーテでさえこの曲が斬新なハードロックに聞こえたのではないだろうか。

森の響フレンドコンサート

札響名曲シリーズ vol.3

美しきアマデウス

11月26日（土）15：00～
指揮／児玉　宏
クラリネット／カール・ライスター
曲目
モーツァルト／
歌劇「フィガロの結婚」序曲
クラリネット協奏曲イ長調 K.622
ディヴェルティメント二長調 K.136
交響曲第35番ニ長調 K.385「ハフナー」

児玉　宏（札響提供）

カール・ライスター（©Kiyotane Hayashi）

■モーツァルト／歌劇「フィガロの結婚」序曲

モーツァルトのオペラは、20作品あまりあるが、その中でも「魔笛」「ドン・ジョバンニ」と並んで有名なのが「フィガロの結婚」だ。モーツァルトオペラの本質は、実は男と女の物語そのもの。これらの作品には、男女の純愛だけではなく、不倫や騙しあいまである。特に不倫や横恋慕は、当時の時代でもやはり話題性が高かったのか「フィガロの結婚」も領主アルマヴィーヴァ伯爵の浮気心をきっかけに男女間の愛憎や欲望をテーマとしたオペラ・ブッファなのだ。プレストによる陽気で軽快な序曲は、これから展開される丁々発止の恋のさや当てを予感させてくれることだろう。

■クラリネット協奏曲イ長調 K.622

モーツァルトは、ピアノをはじめヴァイオリン、フルートなどを独奏とした多くの協奏曲を書いたが、その最後の作品となったのがこのクラリネット協奏曲である。モーツァルトは、親友でクラリネットの名手アントーン・シュタートラーのためにこの曲を作曲したが、はじめはバセットホルンのために書かれ、その後クラリネットに編曲している。当時クラリネットは最新鋭の楽器だったのだが、モーツァルトは、この楽器の特性を十分に引き出し、不滅のクラリネット協奏曲を生み出した。今回は、ベルリン・フィルの首席奏者も務めた世界的名手カール・ライスターのクラリネットが聴けるのも大きな楽しみ。クラリネットの優雅な旋律が作曲者の妙技に操られオーケストラと流麗に交わる世界をご堪能あれ。

■ディヴェルティメント二長調 K.136

モーツァルトが活躍した当時、富裕貴族の冠婚葬祭に演奏される機会音楽として、セレナードやディヴェルティメント、カッサシオンという器楽曲が多くつくられた。中でもディヴェルティメントは、貴族たちが祝宴の際、そのバック・グラウンド・ミュージックとしておもに室内で演奏されていた。モーツァルトは、このディヴェルティメントを20曲ほど作曲しているが、彼にとっては比較的気軽に書かれたもので、それゆえモーツァルトの天真爛漫な素顔が浮かび上がっているようだ。その中で特に有名な「二長調 K.136」は、彼が16歳頃に2回におよぶイタリア旅行から故郷ザルツブルグに戻ってきた時期に書かれた。イタリアで受けたさまざまな影響が反映され、イタリア的な明朗でのびのびとした旋律を聴くことができる。

■交響曲第35番ニ長調 K.385「ハフナー」

この曲は、もともとザルツブルクの富豪ハフナー家の爵位授与式のために書かれたセレナードが原曲となっている。このセレナードは、モーツァルトの父レオポルドのたっての願いでつくられたが、その頃モーツァルトはウィーンに移り住んで1年あまりで、オペラ「後宮からの逃走（誘惑）」の編曲やコンスタンツェとの結婚もひかえ多忙を極めていた。そんな中で作曲されたセレナードは、モーツァルト自身が驚くほどできが良かったため、翌年ウィーンでの皇帝ヨーゼフ二世も臨席した予約演

奏で、交響曲としてつくり直され大好評を得ることとなった。オクターブ跳躍による衝撃的な開始から生まれる雄渾な楽想は、原曲が壮麗な式典を意識してつくられているからだろう。第2楽章は、オペラのアリアを想起する美しい旋律で管楽器も適度な色彩感を加えている。第3楽章のメヌエットも実に典雅で続く第4楽章は、「後宮からの逃走」のアリアが転用され、華やかなフィナーレとなっている。モーツァルトの交響曲の中ではじめて大規模なコーダを取り入れ曲を結んでいるのも大きな特徴だ。

第544回札響定期演奏会

「ベートーヴェン・ツィクルス－4」

12月9日（金）A日程
12月10日（土）B日程
指揮／尾高　忠明（音楽監督）
曲目
ベートーヴェン／
交響曲第2番ニ長調 op.36
交響曲第6番ヘ長調 op.68「田園」

■ベートーヴェン／交響曲第2番ニ長調 op.36

ベートーヴェンは、1802年にハイリゲンシュタットでこの作品を完成させた。ハイリゲンシュタットと言えば、あの有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」が書かれた場所。しかも、その遺書が書かれた時期と一致する。彼は耳が聞こえなくなったことを悲観し、この遺書を弟カルルに宛てて書いたとされるが、そうした時期に、こんなにも勇壮で希望に満ちた楽想を持つ「第2番」がなぜ書けたのであろうか。実は、この遺書が書かれたのは、数年間想いを寄せていたジュリエッタとベートーヴェンの友人ガレンベルクとの結婚が決定した時期とも一致している。つまり、この遺書は、彼の失恋の想いを難聴からの苦悩に転化させ書き綴ったのではないだろうか。ベートーヴェンは、恋多き作曲家であった。多くの女性を愛したが、すべてが身分や経済的理由から成就していない。ヨゼフィーネに心を寄せ、その愛も実らなかった後に彼女のいとこで16歳の美少女ジュリエッタに出会い、一時相思相愛の関係になっている。「第2番」は、まさにベートーヴェンにとってヨゼフィーネの後に現れた女神との幸福な時期に構想が練られている。ベートーヴェンは、難聴が理由で音楽を諦めようとは考えていなかったのではないか。確かにピアニストや指揮者としての活動は諦めなければならなかったが、むしろ生涯作曲家として生きる方向を決定付けたのもこの時期なのではないか。そう考えると「第2番」の根底に流れる力強さに納得がいく。

■交響曲第6番ヘ長調 op.68「田園」

「第5番」と同時期に書かれた交響曲第6番は、性格の違う双生児のように言われるが、確かに「第5番」は動的で凝縮性があり、「第6番」は静的で広がりのある趣を感じる。ベートーヴェン自身の相反する性格が、それぞれに内包されているのかもしれない。しかし、この二つの作品のDNAには共通性もある。例えば第1楽章の1小節目のリズムは8分休符の後、8分音符が3つ続き、フェルマータが動機や主題の区切りをつけて本格始動すること。主題の動機がその後の展開部で利用しつくされるのもしかり。そして、何よりもこの2つの作品が後生の作曲家に極めて重大な影響を与えたこと、言い換えれば音楽史を変えてしまうほどの作品であったことだ。「第6番」はベートーヴェン自身が「田園」と名付け、各楽章ごとに「田舎に着いたときの楽しい気分」と言った叙景的な標題を持たせている。この曲に物語性まではないのだが、ベルリオーズの「幻想交響曲」の元祖でありロマン派交響曲の先駆けをなしていることは確かで、さらに「交響詩」の原点とも言えるかもしれない。楽器編成でも「第5番」同様、ピッコロやトロンボーンが新たに登場するのも興味深い。いずれにしても苦悩を乗り越え自然賛歌への境地に達したベートーヴェンの精神性をじっくりと味わっていただきたい。

札響の第九

「ベートーヴェン・ツィクルス－5」

12月17日（土）19：00～
12月18日（日）15：00～
指揮／尾高　忠明（音楽監督）
曲目
ベートーヴェン／交響曲第9番ニ短調 op.125「合唱付き」
ソプラノ／澤畑　恵美
メゾ・ソプラノ／竹本　節子
テノール／福井　敬
バリトン／福島　明也
合唱指揮／長内　勲
札響合唱団、札幌アカデミー合唱団、札幌放送合唱団

■ベートーヴェン／交響曲第9番ニ短調 op.125「合唱付き」

「ベートーヴェン・ツィクルス」のトリは、やはり「第九」。ベートーヴェンの交響曲は第1番から第8番まで1800年から1812年の間に集中的に書かれているが（同時進行で書かれた曲もある）、この「第九」だけは、第8番の完成から十年以上を隔てた1824年に完成している。しかし、ベートーヴェンは、シラーの詩に音楽をつけることを彼が15歳の頃からすでに考えていたのだ。そして1793年には曲を付けようと試みられ、さらに1809年のスケッチブックには第1楽章第1主題への導入形がすでに書き込まれ、1815年のノートには第2楽章のスケルツォの主題も書き表されていた。

つまりこの作品はベートーヴェン音楽の集大成であり、他の交響曲とは違う特別な意味があるのだ。第1楽章は、冒頭から調性が曖昧な空虚な和音から決然とした主題が現れ、ベートーヴェンの苦悩の道筋を辿るかのような厳しい音楽。第2楽章は、それまでの交響曲の緩徐楽章ではなく、スケルツォという型破りな形により攻撃的な楽想を持つ。第3楽章は、彼が愛した不滅の恋人たちを回想するかのようにやさしさと憧れを持ってゆったりと変奏され、ついにバリトン独唱が「友よ、このような音ではない、もっと快いものに声をあわせよ、喜ばしいものに」と高らかに歌い、合唱を含んだ壮麗な第4楽章へと突き進む。

今回は、ブリテン「ピーター・グライムズ」で札響と覇気のある名演を聴かせた福井敬をはじめ、澤畑恵美など第1級のソリストらがチクルスのフィナーレを彩ってくれる。

札響くらぶホームページの内容

6月にリニューアルした札響くらぶのホームページ（HP）は、1日40～60回位のアクセスを記録しております。カウンターは、1日同じパソコンから何回アクセスしても1回にしかカウントされませんので、もっと多くの回数がアクセスされているものと考えられます。

HOMEページの「お知らせ」は札響くらぶの予定などを掲載し、終了すると削除し、「Topics」にその結果を載せています。この2つは暦年でページを更新する予定です。「コンサート情報」は会員、楽員、札響が主催又は出演するコンサートのうち札幌近郊を主体に掲載しています。コンサートに関する情報は、札響くらぶが札響やキタラ等から収集するほか、会員、楽員等からの情報提供いただき、その情報うち、ご希望により札幌近郊以外のコンサートも掲載し、メーリングリストでも会員にお知らせいたします。（武藤義典）

訂正

札響50周年　欧州公演鑑賞ツアーに参加してのうち、4ページの末尾から4行目「ミュンヘンのガスクイク」を「ミュンヘンのガスタイク」、5ページの上段の写真の説明中「ストーンヘイジ」を「ストーンヘンジ」に訂正します。

札響新専務理事 小沢正晴さんのモットーは

「こんにちは　札響です」

道民・札幌市民に愛される札響を目指したい！

札響くらぶでは札響小沢新専務理事をお迎えしてスタッフともに歓迎会を開催させていただきました。会場はいつもの札響くらぶ会員のたまり場「イル・ネージュ」、歓迎会の始まる前にちょっと時間をいただいて、新専務理事としての抱負を聴かせていただきました。

お互い上着を取っての　インタビューでした。これからの札幌交響楽団がますます市民に愛されるようになります、といった言葉が印象的でした。札響くらぶは市民とともに何が出来るか意を強くしたひと時でした。

本日の参加者が全員そろい、札響くらぶ顧問の竹津宜男さんの一言で歓迎会が始まりました。定期演奏会解説でおなじみの会員の八木さんはじめ皆さんの歓迎の言葉が続き楽しい3時間でした。

小沢専務とともに参加者全員の記念撮影（2011.9.6）

札響くらぶ　札響くらぶ会報で小沢新専務をご紹介したいと思っています。

小沢さん　私は1951年岩見沢万字炭山で生まれ、大学は小樽商大でした。その後北海道新聞社に入り主に事業局でイベント屋をトータル34年間担当してきました。最後の2年間は歴史の街の小樽支社で、地域の皆さんとの出会いがたくさんありました。

札響くらぶ　その中で最も思い出深いことはなんでしたか

小沢さん　何と言っても、2001年の九・一一のアメリカ同時多発テロ事件の翌年2002年7月に北海道近代美術館で開催した「ゴッホ展」です。なんと新記録で28万人の方が入場しました。実は開催までが大変だったんです。テロの後で輸送関係に厳しいセキュリティがあり、作品運送のための保険料が高くなり、作品が搬送できないというトラブルに見舞われ一時は開催を危ぶまれました。そんな困難を乗り越えて開催でき、今では思い出深い出来事になりました。

札響くらぶ　今後の札幌交響楽団づくりについてお聴きしたいのですが。

小沢さん　来て見て2か月ですが、パトロネージュの皆さんへのあいさつ回りが続いています。その中で札幌交響楽団への評価がすごく高いこと、来場された方々の満足感の高い印象を受けます。専務理事としては、2002年の経営破たんから再生し、軌道に乗った札響の経営基盤をさらに強固にする責任があると思っています。愛される札幌交響楽団を目指し、全道へ出かけ「こんにちは　札響です！」をモットーにしたいと思っています。

札響くらぶ　札響くらぶは定期会員だけでなく、一般の方も札響くらぶ会員として札響を支援しています。札響への楽譜支援ももう6年になります。札響くらぶ会員全員から500円の寄付とあわせて任意の寄付を加えて毎年50万円を寄付しています。定期演奏会にはもう行けないけれど札響さんの役に立ちたいと寄付していただいています。これからも札響さんと協力し合って定期会員の拡大や、札響さんを応援していただける方たちを結集していきたいと思っています。

小沢さん　それはすごい取り組みですね。ありがとうございます。私たちも札響くらぶさんとともに札幌交響楽団が道民・市民に愛されるよう頑張っていきます。共にがんばりましょう！握手です！

（副会長　西川吉武）

東日本大震災チャリティーコンサート

大平由美子ピアノリサイタル

あの日から半年過ぎたのに未だに音楽だの芸術だの無縁の生活を余儀なくされている方々の心を思うとかの地に親戚も知合いも居ない上、平穏な札幌に住んでいるのがどんなに有り難いことか。せめて義援金をと、心がけているそんな人々にピアノの演奏が付くそれも飛び切り美しいピアノを聴いて募金になるのは申し訳ないけれどとても嬉しいことです。

特に東日本大震災の二日後のベルリナー・ベーレン演奏会は「もしや中止では？」と思いつつ出かけたら全てを義援金にとのこと我々も大いに賛同しました。

今年のリサイタルには親友を誘った。仕事に追われている彼女の心を僅かでも癒してあげたいと思い「最近疲れが顔にでてきたわよ、たまには音楽で心を洗ったら…」と。

深い森の奥
木漏れ日の中に　独り佇み
心の襞　身体すべて
緑の香りに浸たす

由美子さんのピアノはいつもこんな心地にさせてくれる。

いつの頃か定かではないが私がとても若かったころ叔母が「北大クラーク会館でピアノ演奏会が有るので一緒にいかが」と誘われ、生のピアノが聴けるならと行ったのがまだ小学生のピアニスト大平由美子さんを聴いた最初だった。その時も私は森の香りを感じた。

彼女は札幌に腰を据えてから艶やかさと柔らかさが増したように思うのは私自身の変化かもしれないけれど由美子さんのピアノはいつも心を清めてくれる。

昨年も今年も髪を結い上げたので首筋から背中へかけての美しさに目を奪われる。

あたかも泰西名画の貴婦人の如く。

森の中の散歩のようにうっとりしていたら

ショパンのバラードで「ん？」「え？」「あれ？？…」（生演奏の醍醐味だとハプニング好きは喜ぶ）

珍しく見せた笑顔が照れ笑いだなんて。

でも、とっても可愛いかった。

また来年も楽しみにしています。

（靉）

大平由美子（撮影／小室敏美）

札響物語 55

北電ファミリーコンサート［8］

竹津宜男（札響くらぶ会員）

1977年4月28日の第53回には10年間の修道士生活から還俗した指揮者、黒岩英臣氏が登場した。修道士の生活をしていた人だけあって極めて真面目で常に自分に悩んでいてなんとなくオーケストラに馴染めない風だった。なにかと声掛けをしたが「久しぶりに自転車に乗っているような気分で我ながらぎこちなくて緊張しています」と言っていた。たしかにベートーヴェンの交響曲第8番は聴いていて肩が凝るほど四角四面だった。しかし、この演奏会が日本デビューだった協演したハーモニカ奏者の崎元譲はぴったり息が合います、と喜んでいた。

同じ年6月、第54回には九州交響楽団常任指揮者ドイツ人のフォルカー・レニッケが登場した。レニッケはブレーメン市の生まれでヨーロッパの歌劇場で首席指揮者や音楽監督を歴任し、前年1976年9月に九州交響楽団常任指揮者として来日した。このコンサートでは札幌には初登場のピアニスト花房晴美とモーツァルトのピアノ協奏曲第20番ニ短調k.466（モーツァルト通には通称ヨンロクロクと呼ばれている。）とグリーグのピアノ協奏曲を協演し、交響曲はブラームスの第4番だった。

ドイツ人で経験豊かな指揮者だけに前回の黒沼英臣とは全く違った手馴れた演奏だった。フランス帰りの若いピアニスト花房晴美はとてもきれいなドレスを着て現れて会場から盛んな拍手を受けていた。後で本人に聞いたら知り合いからパリコレで着られた物を自分の身体に合わせてもらったのだそうだ。「安かったのですよ」と言っていた。勿論演奏は評判通り素晴らしかった。花房晴美はよほど評判が良かったのか間もなく12月の第61回に再び登場してベートーベンのピアノ協奏曲第1番を佐藤功太郎と協演した。こちらも評判が良かった。

1978年2月第63回にはフランス人指揮者ジェローム・カルタンバックが初登場する。カルタンバックは1976年民音指揮者コンクールで第2位に入り入賞者記念コンサートで札響とはラヴェルの「マ・メール・ロワ」を指揮して絶賛を博した。いち早く札響が単独で声を掛けて招聘した指揮者である。これが縁で関西民音主催公演に札響が呼ばれて大阪フェスティバル・ホールで公演することになり、更に大阪の「ザ・シンフォニーホール」落成記念コンサートに招待されるきっかけになる。カルタンバック登場の出来事は札響物語第23号で紹介してある。

札響創立50周年&50年史発刊記念パーティー

9／10札幌パークホテル3階パークホール

ベートーベン・ティクルス#1を聴いた後の午後6時から開かれた。定演を聴いた我々スタッフは午後5時過ぎにパークホテルに向かった。パークホテルに着くと天皇陛下がお出かけになるということでホテルに入られず、南9条通に出て天皇陛下をお見送りする。

受付を済ませ、開場を一階で待っていると結婚式が3組、終わってお見送り中のカップル、披露宴でお色直のカップル、これから式に向うカップルに出会った。

開宴10分前に開場となり、私たちが陣取ったテーブルにはトランペットの前川さん、ヴィオラの荒木さん、フルートの山崎さん、ヴァイオリンの土井さんが付いていてくれ、話し相手や何かとお世話をしてくれた。

札響くらぶからは鈴木、西川両副会長ご夫妻はじめ多くの会員、スタッフが出席していた。会長は公務の都合で7時を過ぎるとのこと。パーティーは次第に従って進み、途中、札響小松総務部長から仙台フィルの大澤専務の紹介をいただき、大澤専務から義援金の謝礼のことばをいただきました。小松部長に感謝申しあげます。また、道新文化部の石井記者にも会い、札響くらぶコンサートの紹介の取材などをお願いしました。

ニューイヤーパーティーでもおなじみの札響ビッグバンドの登場でパーティーも終わりに近づき、会長の上田札幌市長が到着、あいさつで終了となりました。

帰りに50年史を受け取り、帰宅して早速ページをめくると、欧州公演の写真などがずらり、本文は写真を多く使用した読みやすい通史に年表と続き、全演奏会記録、札響の歴史がびっしりと詰め込まれた1冊となっていました。（M）

デビュー30周年記念

清水和音のオール・ラフマニノフ・コンチェルトを聴いて

今年の札響の特別企画、「清水和音のオール・ラフマニノフ・コンチェルト」コンサートが7月16日キタラで行われました。

このコンサートはピアニスト清水和音さんが、全てソリストを務めて、ラフマニノフのピアノコンチェルト1番から4番を演奏してしまうという驚天動地なものです。

普段よく聴くラフマニノフのピアノコンチェルトと言えば、第2番か第3番ですが、どちらも1曲弾きこなすだけでも大変な曲だと思うのですが、その2曲だけではなく、比較的演奏される機会の少ない第1番と第4番も加えて4曲とも一遍に演奏するとは、清水さんのデビュー30周年の企画としてもすごいことです。

前回聴いた清水さんの演奏は、昨年6月の名曲シリーズですからほぼ1年ぶりです。そのときの演奏も素晴らしいもので、尾高さんの指揮で今回と同じラフマニノフの第2番でした。

普段の名曲シリーズは午後3時に開演して休憩1回で終演は5時頃なのですが、今回はコンチェルトを4曲ということで、午後2時に開演して休憩2回で3時間に及ぶ演奏会でした。

今回の指揮は高関さんが務められましたが、長丁場をさすがの安定感で指揮されていました。私は聴いているだけでも結構疲れましたので、改めて最後まで素晴らしい演奏を聴かせてくれたオーケストラの皆さんのポテンシャルに脱帽です。

清水さんの演奏はさすがのものでしたが、やはり最後に演奏された第3番がまさに弾ききった感じで大いに盛り上がった演奏会でした。（村上）

第540回札響定期演奏会 練習見学会に参加して

ステージの上に休憩を終えた団員さんたちが戻ってきた。カラフルな私服姿がステージを賑やかにしている。さらにそれぞれがそれぞれの音を出し合い、ますます賑やかだ。高関さんも今日はシャツ姿。さっそく今回のコンマスである三上さんと楽譜をはさんで話し合いをしている。

ぴったり12時。土井奏さんが中央で右手を挙げると音がピタリと止まった。土井さんはインスペクターという任務で、練習時間の確認や時間の管理などをする、マエストロと団員さんの間に立つ重要な役目らしい。

さて、静寂に包まれたステージに今度は三上さんがすっくと立ち、いつもの音合わせが始まる。そしてブラームスの2番、軽やかな3楽章が始まった。と、すぐに高関さんの手が止まり指示が出される。マイクを通して高関さんの言葉が聞こえてくる。

今回は札響事務局と合同の練習見学会で定期会員と札響くらぶ員が参加している。練習の様子がよく伝わるようにと高関さんがピンマイクを付けてくださっているのだ。細やかな指示のあと「お願いします」という高関さんの言葉で再び同じメロディが響く。指示の内容はマイクを通しても音楽に疎い私にはわからないが、確かに音が変わったのはわかる。そうか…団員さん一人ひとりが持ち寄った音がここで音楽に造りあげられていくのだ。

高関正指揮者（札響提供。8／18キタラ）

終了後に、私たちが座るCBブロックに高関さんが来てくださった。開始前に「高関さんに聞いてみたいこと」というアンケートを取っていて、その一つ一つに答えてくださるのだ。

「団員さんとのコミュニケーションは？」という質問にはていねいな話し方を心がけているとのこと。なるほど、先ほどの練習の中でも、指示の後に必ず「お願いします」と声をかけていた。「でも、ゴマすりはしませんよ」と笑う。

「この2番の聴きどころは？」という質問には、オーストリアの避暑地の美しい自然や朝日が昇る様子を思い浮かべながら聴いてほしいとのこと。本番への期待が高まる大切なお話の数々だった。

（静）

「999人の第九の会」に参加して

私が所属する「北海道ボランティアコンサート999人の第九の会」は、今年9月24日、山形交響楽団音楽監督「飯森範親先生」指揮にて「札幌交響楽団」でキタラのステージP席に266名が立ち、27回目の演奏会を終えました。旭川市、栃木県、千葉県、東京都、神奈川県、大阪府、鹿児島県から27人もの参加者。そして嬉しい事に3月11日の未曽有の東日本大震災の被害地、宮城県岩沼市からも参加者が…。

毎年道外から参加者が多いのは、深緑の中島公園に建つ素晴らしい音楽ホール、キタラ、そして北海道の宝、札幌交響楽団の演奏で歌えることに魅力を感じるのだそうです。指揮者の先生は札響事務局が2、3カ月かけて紹介してくださいます。過去、十束先生（4回）手塚先生、円光寺先生（4回）、梅田先生（4回）、山下先生、新通先生（2回）、末廣先生（2回）、高関先生（3回）、2004年の第20回記念には、札響音楽監督の尾高忠明先生が快く私たちの前で指揮棒を振って下さいました。

1997年キタラが建立の年に札幌・ミュンヘン姉妹都市提携25周年事業の一環として「ミュンヘナーオラトリエン合唱団」23名が来札され、キタラで札響とジョイントすることができました。その年の10月私達もミュンヘンへ。旧王室内にある「ヘラクレスザール」でジョイントしました。第九のおかげでウイーンの楽友協会、ハンガリーとウイーンの国境「鉄のカーテンの引かれた場所」にある小さな可愛い町ショプロンの洞窟ステージで歌った第九、鳴門市や国技館・映画「バルトの楽園」を記念して　年末の紅白歌合戦のステージ「NHKホール」にも立つ事ができました。

岡山県津山市では、亡き若杉弘先生指揮での第九（しばらく札幌に行ってない～行きたいな）あの言葉が忘れられません。札響くらぶの皆さんも来年9月22日に一緒に唄いましょう。是非お待ちしております。

田山登代美（札響くらぶ会員）

広がるファンタジックな世界
CD「レ・ロゾー「3つの葦」／トリオ・ダンシュ札幌」を聴いて

昔のラジオの公開番組に、クラシックを聴いてその時に浮かんだ情景や簡単な物語を発表しあうというのがあった。発表するのは、小学生から年配の方まで様々で、1回に3～4人ぐらいだったと記憶している。全員が発表しあった後、実はこの曲は誰々の○○という曲で…という専門家の解説があった。私が小学生の頃だったと思うが、放送のある毎週日曜日を楽しみにしていた。

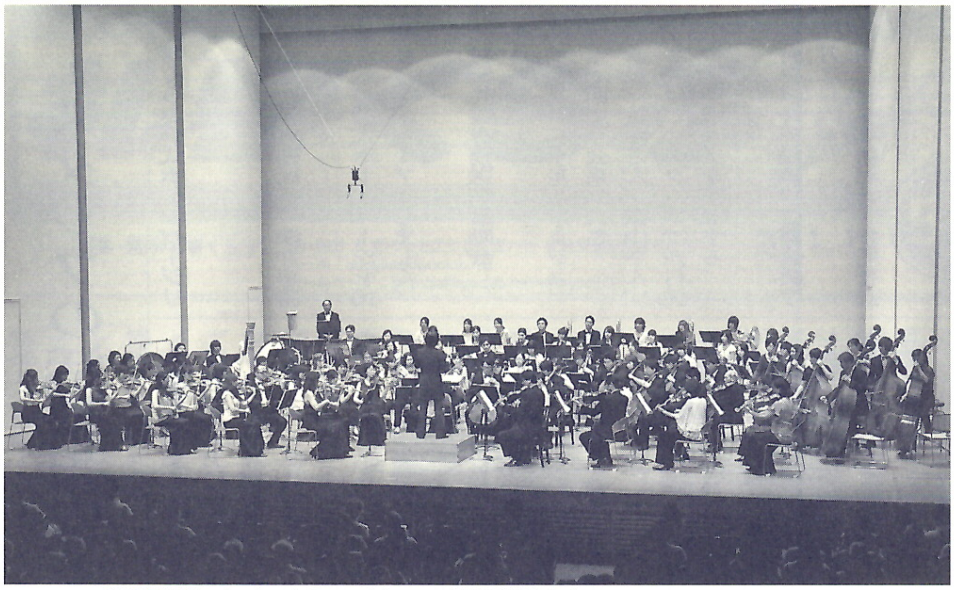
なぜこんなことを急に思い出したかというと、「トリオ・ダンシュ札幌」のCDを聴いたことがきっかけなのだ。CDをかけ、音が鳴り響いたとたんに、たちまち私はファンタジーの世界に入り込んでしまったのだ。舞台は中世の森の中のお城、そこで繰り広げられる真夜中の秘密のパーティー、道化が所狭しと動き回り、場を盛り上げる。主人公は小さなプリンセス。興味津々に客たちの間から見上げる。でも真夜中なので次第に眠くなるのだが、道化や動物たちがちょっかいをかけてくる。お城から森の中に飛び出し動物だちと楽しく遊びまわるが、だんだんと夜が明けてくる。しかたなくお城に戻り、ベッドに入って眠りに落ちる…。子どもに戻った気分で、こんな物語が私の頭の中に浮かんできた。そして、そういえば、昔こんなラジオ番組があったなあ…と思い出したのだ。

オーボエ、クラリネット、ファゴットって想像力をかきたてる楽器なのかもしれない。オーボエはどこかエキゾチックな音だし、ファゴットはとぼけた雰囲気を醸し出す。クラリネットはその時々で自由に変身する。それだけで、物語が生まれてきそうな気がする。3本の楽器がそれぞれの個性を主張しつつ、時には寄り添って美しいハーモニーを奏でる。このCDは、オーケストラで聴くのとはまた違った楽しさを私に教えてくれた。冒頭のラジオ番組に戻る。もう半世紀も前のことなので定かではないが、そこでは確か最後に、参加者の中で一番いい想像力を発揮した人を表彰していたように記憶している。さて、今回の私の想像力はどう評価されるだろうか…。（み）

道民・オーケストラワークショップ

8月14日に第6回「道民・オーケストラワークショップ管弦楽団演奏会」を「ちえりあホール」で行った。

この演奏会は（公財）札幌交響楽団、（財）札幌市生涯学習振興財団、NPO法人ハイメスの3者で作る実行委員会（実行委員長：竹津宜男）が主催し主管はハイメスが担う事業である。



第6回道民・オーケストラワークショップ管弦楽団演奏会（竹津提供。9／16ちえりあホール）

札幌には全国に誇る札幌交響楽団がありアマチュア・オーケストラも多数活躍している。アマチュアの管弦打楽器奏者の夢は札響のメンバーに指導を受けてプロと一緒にオーケストラで演奏出来ることであり、目的はアマチュア奏者のアンサンブル力の向上をはかることである。これまで指揮者は末広誠氏で3回、新田ユリ氏で2回行い今回も新田氏にお願いした。

また、プログラムは第1回のベートーベン交響曲第7番から始まって「シェエラザード」、ショスタコーヴィチ交響曲第5番、「オール・シベリウス・プログラム」、ベートーベンの劇音楽「エグモント」全曲など意欲的なもので、今回はマーラー没後100年を記念して交響詩「巨人」を取り上げた。交響詩「巨人」は交響曲第1番「巨人」のオリジナル版で5つの楽章からなり、交響曲には含まれない第2楽章「花の章」がある。北海道では勿論初演だが世界でもめったに演奏されない音楽らしく楽譜の不備に悩まされた。スコアもパート譜も手書きのもので、指揮者の新田さんは3ヶ月かけて全てのパート譜に直しを入れられた。相当消耗されたようだったが「マーラーの手書き譜に触れられてとても勉強になった」と言われた。聴きに来て下さった皆さんも聴いたことがない「花の章」を聴けたこと、きちんと指導されたオーケストラの熱演に感動していただくことが出来た。

私もホルン・セクションに横からにらまれながらヴィオラで参加させていただいた。学生時代以来のヴィオラの演奏だった。不備な楽譜が読みにくいのは別にしてマーラーの音楽の激しさ、フォルテで速い動きの連続なので弓を持つ右腕、肩の凝りに参った。忙しい中、暑い中熱心にご指導いただいた札響の先生方に心から感謝のワークショップだった。

竹津宜男（ハイメス副理事長）

札響「夏の特別音楽会」

小林研一郎の世界

8月30日、キタラの聴衆は熱狂しました。昨年に引き続き「未完成」「運命」「新世界」。誰でも知っている名曲中の名曲です。3曲とも札響は色々な指揮者のもとで毎年何回も演奏しています。でも間違いなく何かが違うのです。コバケンが振ると私たちは無条件に興奮します。札響も驚くような見事な演奏で応えます。

一曲ごとにスタンディングオベーションが入り〝ブラボー〟の声と共に〝アンコール〟の声も聴こえる演奏会を私は他に知りません。通常の札響の「定期演奏会」や「名曲シリーズ」では到底考えられない現象です。しかも自然に会場全体がそのような雰囲気になるのです。

他の指揮者と何が違うのでしょうか。難しい事は素人の私には判りませんが、私たち聴衆は情熱的なコバケンの世界に完全に引き込まれてしまいます。まるで魔法にかかったようで、しかもそれがとても心地好い世界なのです。私には曲が全体にややゆっくりしたテンポでオーケストラには存分に歌わせているように感じました。それと例えば「新世界」第2楽章の一瞬の静寂にはホールの全員が息を止めドキドキする緊張感。そして絶妙の〝間〟。演奏者から聴衆までがコバケンと一緒に呼吸しているのです。

《コバケンのチケットはP席から埋まる》という噂は本当なのかもしれません。2階のCB席まで独特の〝唸り〟が聴こえるのですからP席からなら彼の豊かな表情や目の動き、汗の飛び具合なども手に取るように解ることでしょう。私も来年はP席で観て聴いてみたくなりました。

誰が名付けたのか知りませんが《炎のコバケン》とは正にピッタリのネーミングだと思います。叶わぬ夢とは知りながら〝コバケンが年に一度でなく、定期演奏会や名曲シリーズに登場してくれたらなぁ〜〟と願わずには居られません。聴衆は少なくても1〜2割は増え、一度聴いた人は感動し恐らく彼の虜となるでしょう。

毎回、最後に短い挨拶があります。それが如何にも彼らしくコバケンの人柄や音楽に対する想いと私たち聴衆へのサービス精神に満ち溢れているのがファンには何とも堪りません。

演奏会終了後すぐには席を立てず、その場で涙を拭いている人を何人も見ました。恥ずかしながら私もその一人です。《コバケン節》をたっぷりと味わい至福のひとときを過ごせた夏の夜のコンサートでした。

（庵談手）

小林研一郎演（札響提供）

スタッフの活動報告（平成23年7月～9月）

●札響くらぶ公式ホームページリニューアル
6月27日（月）
担当／武藤事務局長、深井事務局次長
札響くらぶ公式ホームページを10年ぶりにリニューアルしました。

●西村元札響専務送別激励会
7月2日（土）
ダイニング「イル・ネージュ」
担当／西川副会長（14名）
上田会長、竹津さん、横山さん、八木さんはじめスタッフで西村元専務の送別激励会を開催する。

●仙台フィル支援義援金募金終了
7月7日（木）
担当／武藤事務局長、中居普通会計担当
4月上旬から仙台フィル支援に特定した義援金の会員からの募集をしておりましたが、6月末をもって終了いたしました。義援金は、92名の会員から552、000円寄せられ、5月6日に482、000円を札響と連名で、7月7日に70、000円を札響くらぶ単独で仙台フィルに贈りました。

●第9回札響くらぶコンサート実行委員会開催
7月11日（月）
エルプラザ4階男女参画研究室2番
チケットの売り上げ状況及び今後のチラシ織り込み、一般販売のメディア対策、協賛、招待などについて検討、協議する。道教育大岩見沢校の青山さんが教育実習で参加。

●会報「札響くらぶ」第55号発行
7月29日（金）
担当／木村由華
第540定期練習見学会の案内、札響50周年記念欧州公演参加記、札響くらぶシンボルマークデザイン募集、伊藤亮太郎CD発売など32件掲載、14ページに増ページとなる。

●会報「札響くらぶ」第55号発送
7月29日（金）
札幌コンサートホール2階大会議室
担当／武藤事務局長（8名）
会員、マスコミ関係、札響関係に約700部発送。会員に札響くらぶコンサートチラシ、楽員にHPリニューアル・コンサート情報提供依頼を同封する。

●23年度第5回札響くらぶ運営会議・（第11回）札響くらぶコンサート実行委員会合同会議開催
8月17日（水）
札幌コンサートホール1階第2会議室
担当／定政事務局次長（8名）
第11回札響くらぶコンサート実行委員会においてチケットの販売状況、販売促進に関する取り組み、協賛・招待に関する取り組みなどを協議、第5回札響くらぶ運営会議にて第540回定期練習見学会の受付責任者を定政事務局次長に決定、会報第56号の記事依頼の確認、19日、30日のチラシ折込担当確認、次回会議の日程について協議する。

●第540回定期演奏会練習見学会
8月18日（木）
札幌コンサートホール・Kitara大ホール
担当／定政事務局次長（11名）
札響と合同で実施する今年度第1回目の練習見学会が札幌コンサートホールで実施いたしました。参加者は札響くらぶ11名、札響124名、計135名。見学会の最後で指揮者の高関さんがCB席までいらして解説されました。

●小沢札響専務歓迎会
9月6日（火）
ダイニング「イル・ネージュ」
担当／武藤事務局長（14名）
会開催に先立ち小沢札響専務に会報第56号用の取材を行う。会には上田会長、竹津さん、横山さん、八木さんはじめスタッフで小沢専務の歓迎会を開催する。

●23年度第6回札響くらぶ運営会議・第12回札響くらぶコンサート実行委員会合同会議開催
9月7日（水）
札幌コンサートホール2階第2会議室
担当／武藤事務局長（8名）
第12回札響くらぶコンサート実行委員会では、チケットの販売状況の報告、交流会について協議し、開催しないことに決定、第6回札響くらぶ運営会では号外第3号の内容、札響くらぶ個人情報保護方針の改定、第5回JOFC総会in金沢の参加者、スケジュールの確認、会報第56号の記事の状況確認などを協議する。

●会報号外第3号発送作業
9月12日（月）
札幌コンサートホール2階第1会議室
担当／武藤事務局長（4名）
会報号外第3号（コンサートニュースNo.3）の会員宛378通、2012年度の会員証の発送作業を行う。

●第5回JOFC in 金沢に参加
9月17日（土）
ANAクラウンプラザホテル金沢3階鳳の間
担当／武藤事務局長（12名）
9月16日11名が出発、1名17日出発、現地で全員合流、17日総会、交流懇親会、二次会に出席し、2名帰札、10名は18日石川県立音楽堂見学、金沢市内観光などを楽しんだ後、19日帰札する。

●23年度第7回札響くらぶ運営会議・第13回札響くらぶコンサート実行委員会合同会議開催
9月26日（月）
札幌コンサートホール2階第2会議室
担当／武藤事務局長（8名）
第13回札響くらぶコンサート実行委員会では、チケットの販売状況、販売関係の報告、プログラム、チラシ・アンケートの折り込み、写真撮影、報道機関への連絡その他について協議、第7回札響くらぶ運営会では第6回JOFC総会in札幌での開催、会報第56号の発行日（10／25を予定）などを協議する。

編集後記

◆遊び呆けていたら原稿の締め切りが、まるで売れっ子作家みたいなことを言ってみる。（霞）

◆9月中旬の金沢は、日中の気温が34℃の猛暑。3日間ともエア・コンを付けっぱなしで寝ました。札幌へ戻ったら17℃。改めて北海道へ永住する喜びを感じた旅でした。（里）

◆今号は、各記事に割り当てた字数を守って書いてもらおうと各担当者にお願いしてきましたが、守っていただけた記事は3件ほどでした。
しかたなく、札響くらぶからのお知らせなどはほとんど割愛せざるを得なくなりました。
慣れない原稿書きを無理を承知でお願いしたりしているので、やむを得ないとは思いますが、ページ数を固定した以上は、むやみにページを増やすわけにはいかない、しかし、投稿は削るわけにはいかない、あれこれ悩みながら56号も25日の発行日をにらみながら何とか脱稿した。（武）